

70 華岡青洲・吉益南涯編「險証百問」の成立に関する新発見

誌上発表

松木 明知

弘前大学医学部麻酔科学教室

青洲の標語の一つに「疾病を療せんと欲すれば、当にその内外に精しかるべし。方に古今なく、唯其の知を致すべし。」がある。外科などの専門科を学ぶ際、基本としての内科も重要であることを指摘した言葉である。青洲には『瘍科神書』、『瘍科瑣言』などの外科の著述がある。そして、内科の重要性を主張するのであれば、それを証する著述があったとしても何ら矛盾するものではない。しかし、青洲には『痢疾瑣言』、『天刑秘録』などの内科の単独疾患に関する著述はあるものの、総論的著述は極めて少なく、わずかに『險証百問』と『傷寒論講義』の2著のみである。ここでは本問玄調の『春林軒二十一種』(三集)に収載されている『險証百問』を対象に論を展開したい。本書は青洲が1790年代前半までに治療に難渋した症状や疾患についての疑問に端を発するものであり、青洲の内科全般に関する考えが述べられている。

本書は青洲の内科の学統に関して些かの示唆を与えるものである。多くの史料は青洲が吉益南涯(以下「南涯」)の門で古医方を学んだとするが、不思議なことに南涯時代の門人名簿に青洲の名前は見いだされない。本書の名は『春林軒二十一種』、『華岡氏遺書目録』に披見されるが、呉は1923年の著書の中で言及しなかった。1965年西岡一夫は本書を訳注したが、本書の初出を1803年とし、剩え本書を青洲の南涯に対する陰謀の書であるという荒唐無稽の論を展開した。以上述べたことによって、本書が適切に調査研究されてこなかったことが理解できるであろう。

このような誤った見解は従来の本書の研究が不十分であったことを物語るものであり、とくに本書成立の経緯を記した1810年8月の野村 鄂の「險証百問序」を適切に理解しなかったためと考えられる。野村の漢文の序は漢和辞典にもない熟語を駆使して難解であるが、肝心の箇所を読み下し文にして示すと「その平昔、治を施して治せざる者数十条。筭記して以て後事の師となす。門人中川生これを抄写して、これに加えるに己の難とするところを以てし、以てその数を充たして百問となし、答えを吉益南涯先生に求める。」(句読点一松木)つまり、青洲の「險証」のメモを中川修亭(以下「修亭」)が改訂増補して100問とし、それを南涯に提出して答えを求めたのである。このことから、原初の青洲のメモには100問未満の問が記されていたことが分かる。修亭が南涯の門に入ったのは1793年であるから、それまでに修亭による改定が行われたことも明らかである。南涯の答が1798年までに完成したことは秋江盛言が書写した写本で実証され、青洲が南涯の答を見て不十分であるとして、自らの答を講述したのが1810年3~8月であることは、桑野子礼の写本、鶚軒文庫本によって実証できる。すなわち『險証百問』の成立を4期に分けて考えると理解しやすい。

第1期：青洲の「險証」の87問の「問」と修亭による改定増補「100問」の成立

第2期：南涯の100問に対する答の成立

第3期：青洲の100問に対する答の成立(南涯の答を読んだ上で)

第4期：竹中文郷、浅田宗伯らによる南涯、青洲の答に対する感想の成立(追加の答)

それぞれの期を実証する写本が存在する。原初の青洲の問は87問であったことは、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵の番場 寧の写本によって証明され、修亭が各問を分解して増やして100問としたが、修亭による追加は第50問「妊娠咳嗽」の1問のみであった。なお修亭は南涯に100問を青洲の「問」ではなくして自分の「問」として提出した。青洲の意図する所ではなかったと考えられる。『險証百問』は青洲の内科の見識を知る上で不可欠の著述であり、1810年8月に成立した。